

平成30年度小松市立符津学校 学校評価

めざす児童生徒像

自分の考えをもち、考え方を進んで表現する子

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		達成状況の分析	改善策
			評価達成度アンケート内容・調査項目			
学校で設定する重点項目	説明する力の向上	①の4段階評価のA+Bの割合が80%以上にする。	① 算数科の授業の中で事象・考え方を言葉・式・図・表などを使って説明している。 ② 手本となるノートの掲示・交流を行っている。 ③ パワーアップタイムで、説明する問題に取り組み、解説、解き直しを行っている。 ④ 符津っ子テスト（説明する問題を含む）で平均点70点以上とっている。 集計	授業の中では、教師の意識が高まっていること、児童が自分の考えを表す時に、式の意味をふき出しに書いて明確にしたり、考え方の理由を表現したりすることができた。しかし、それを説明に生かすことができず、確実な力の定着にはつながっていない。また、どのように表現するとよいのかを児童同士で交流することができなかつた。	・自分の考え方やまとめを書く時に、その時間のキーワード（算数用語）を入れて書くことを意識して取り組む。 ・単元末に、学力調査問題（思考を要する問題）に取り組み、自分の考え方を表現できるかを見とる。	
石川県共通重	業務働き方の改善	①③の4段階評価のA+Bの割合が90%以上にする。	① 自分の校務分掌を自覚して行い、組織的な学校運営がされている。 ② 定時退庁日を設定し、定時退庁を行っている。 ③ 電子会議室を活用し、印刷・配布時間や連絡時間の短縮を行っている。 ④ 最終退庁時刻を設定し、守ろうと意識する。	最終退庁時刻を設定し、職員室に掲示した。それが意識し、また声を掛け合うことで、それまでに退庁できる職員が置くなった。しかし、定時退庁日の割合も低く、個人差もあることは、これからも課題である。	定時退庁日には朝の職員朝礼でのことを知らせ、退庁時刻になったら声を掛け合い徹底できるようにする。 電子会議室を利用したり、データーを整理したりすることで、業務の効率化を図る。	
小松市共通重点項目	学校研究	②③の4段階評価のA+Bの割合が95%以上にする。	① 校長のリーダーシップのもと、研修リーダー等を校内に設け、校内研修の実施計画を整備するなど、組織的に、継続的な研修を行っている。 ② 指導主事や大学教員等の専門家が、校内研修の指導のために定期的に来校している。 ③ 教員一人一人が授業研究を伴う校内研修を計画的に実施している。 集計	全員が研究授業・事前授業に取り組むことができた。研究授業に向けては、学年部会・指導案検討・模擬授業を行ない、全体で単元について考える時間を取つた。また、研究授業では、校内研修サポート事業を活用し、指導主事を招聘して指導・助言を頂き、研究を深める機会となつた。	全体研究授業の時期が重ならないよう、年間計画を見直す。また、効率のよい会の持ち方について検討していく。	
	指導力の向上	①④の4段階評価のA+Bの割合が80%以上にする。	① 児童生徒が自らが設定する課題や教員から設定される課題を理解して授業に取り組んでいる。 ② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。 ③ (発表力) 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。 ④ (記述力) 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。 ⑤ 児童生徒は、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている。 ⑥ 児童生徒の資質・能力がどのように伸びているかを、児童生徒自身が把握できる。 ⑦ 一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行っている。 集計	前時のふり返りを児童自らが行い授業を始めることができている。また、学習問題を提示すると、これまでの既習を生かして考えることができ。しかし、児童の思考の流れと本時の学習課題がスムーズにつながらず、児童の思考が切れてしまうことがある。児童の学習意欲のさらなる向上、教師の授業実践の意欲の向上に努めたい。	教材研究の仕方について具体的な方法を共通理解し、児童の思考の流れを意識したり、教師の手立てや関わりをさらに深めたりしていく。	
	学力調査・教科	がんばりテスト（漢字・計算）で両方80点以上取っている児童の割合を80%以上にする。	① 学力調査の自校採点の結果を全教職員で共有し、経年分析に基づいて、重点目標や具体的な取り組みが設定されている。 ② 学力の重点目標や取り組みは全教職員で共通理解し、目標を達成できるよう取り組みは徹底して行っている。 ③ 学力向上ロードマップにおける各自の役割を教職員が理解し、定期的な検証がなされている。 ④ 近隣等の小中学校と学力調査の結果や分析、成果や課題を共有している。（小中連携） ⑤ がんばりテスト（漢字・計算）で両方80点以上取っている。 ⑥ 目標を達成できなかった児童に個別支援を行っている。 集計	職員アンケートで、4段階評価のA+Bの割合が①は100%、②③は93%だった。学力調査の結果から課題として見えてきた「説明する力」をつけるために、算数科の單元に重点指導事項として取り上げ、意識して取り組めるようにしてきた。 がんばりテストに向け、漢字計算の復習の仕方を検討、見直しをして効果が表れた学年があり、⑤の若干の上昇につながつた。個別支援を全職員協力して行つてきたことが⑥100%に表れている。	次年度に向けて学力向上ロードマップを見直し、取り組みを徹底していく。 効果が出ている漢字計算の復習の仕方を継続していく。 学力調査に関して小中連携ができるよう、会の持ち方を検討していく。	
	家庭学習	家庭学習強化週間中、宿題を5日間連続提出できた児童の割合を90%以上にする。	① 自分で計画を立てて勉強している。（3年以上） ② 児童生徒の家庭学習の評価・指導を行っている。 ③ 宿題を家で行い、提出している。 集計	計画を立てて学習することを意識できるよう、カードで学習を始める時刻と目標時間を書き取り組んだ。家庭学習強化週間に守れた児童は多かった。職員アンケートで下がり児童の結果との差が小さくなつた。 時間が確保できず家庭学習の評価・指導が手薄になつた職員がいる。 ③の宿題を5日間連続提出できた児童の割合は、下がつてしまつた。1日忘れて提出できず達成できない児童が多い。	計画を立てて学習するようカードを使い意識づけていく。 会議等の設定を検討し、時間を確保していく。 家庭学習の意欲を低下させないよう、宿題提出率を指標とし、家庭と連携しながらあげていく。	

平成30年度小松市立符津学校 学校評価2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（8月提出）	取組の成果と課題（3月提出）
生徒指導	いじめ・不登校の未然防止 ・5つの気（元気・やる気・本気・勇気・根気）を全校児童に浸透させ、安心感を与える「つなぐ・生かす・認める」の働きかけを行う。集会での発表や文化行事・体育行事の機会で自己存在感を与え、授業では自己決定の場を設けながら児童が何事にも一生懸命取り組める集団をつくる。 ・社会性、人間関係の基盤となる、心をこめたあいさつを自分からできる児童を育成するために、運営委員と6年生を中心として、年間を通して朝の挨拶運動やたてわり活動を行い、高学年の手本となる態度を示し全校に広めていく。	・年度当初に5年生が「5つの気」を踏まえた授業モデルを全校集会で披露した。それを受けて、他学年でも重点目標を設定し、児童一人一人が活躍できるような場づくりをした。 ・運営委員を中心にあいさつリレーやあいさつストリートなど、あいさつを広める取組を実施し、全校児童が意欲的に参加することができた。 ・進んであいさつした児童が89%に対し、あいさつが良くなるようにしたい児童が97%と8%高く、2学期には気持ちはだけではなく実践できる児童が増えるような取り組みや呼びかけをしていく。	・5年生が示してくれた授業モデルをもとにクラスで5つの気プラス1を具体化した目標を作り、それを達成できるよう各クラスで取り組んできた。しかし、年間を通して達成できていない部分もあるので、3学期はクラスで1つの気を目標として、重点的に取り組むことができた。 ・運営委員を中心にあいさつリレー等の挨拶を広める取組を実施し、全校児童が意欲的に参加することができたが、継続性が課題である。 ・後期は、進んで挨拶した児童が91%、あいさつが良くなるようにしたい児童が97%と、前期比べ2つの差が少し縮まり、実践できる児童が増えってきた。
保健健康教育	けが予防に対する意識の向上と体力作り ・外遊びを奨励し、けがをしにくい体をつくるために体幹トレーニングや準備体操を学校保健委員会で紹介し、児童の生活に取り入れていく。 ・学校全体のけがの状況を児童に知らせ、それを活用して学級活動で指導したり、学校保健委員会で呼びかけたりして、けがの予防に対する意識を高める。	・スポーツチャレいしかわに取り組み、体幹を鍛えるためのトレーニングを実施しているクラスは、77%であり、まだ、取組が十分でないクラスがある。スポーツチャレについては、4種目の取組を担任に啓発し、体幹トレーニングについてはOJTを行い、共通実践をしたい。 ・保健委員会の活動の中に、けがをした場所の人数を揭示したり、放送で廊下を落ち歩いて歩くよう呼びかけたりしてけがをしないように啓発してきた。学級担任には、けが予防の学級指導を呼びかけ、参考資料を授業で使用できるように用意した。児童アンケートの安全のルールを守っているかは、97%と意識は高かった。	・スポーツチャレいしかわに取り組み、体幹を鍛えるためのトレーニングを準備体操に取り入れているクラスが100%になった。スポーツチャレの8の字跳びの回数は、クラスごとの記録の更新が分かるように体育館に掲示した。 ・学校保健委員会で本校のけがの状況と分析を児童保健委員が全児童に知らせた。また、プロサッカーチームのコーチの講演により、けがを予防するストレッチ体操を4、5、6年児童と教職員対象に啓発できた。また、児童保健委員会の活動で、1、2、3年生にそのストレッチ体操を教えることができた。ストレッチ体操を体育の授業の準備運動に取り入れるよう担任に呼びかけた。児童アンケートの安全のルールは守っているかは100%となり、より一層安全面への意識は高まった。
読書教育	読書の質の向上 ・チャレンジブックを整備し、チャレンジブック読書月間を設けたり、本の紹介など内容に興味を持たせる企画をしたりして、良書に親しませていく。	・1学期の図書室の貸し出し冊数は、一人平均79、7冊だった。利用児童が学年で偏ることなく全学年が平均50冊以上となり読書への意識が高かった。 ・チャレンジブックは司書による選書の見直しが行われ、教室横の廊下にブックトラックを置き、いつでも読むことができる環境にした。7月にチャレンジ読書月間を設け、各クラスの担任の声かけや図書委員の意欲的な活動により、学校全体で読書する雰囲気作りができた。	・2学期末までの図書室の貸し出し冊数は一人平均146.4冊だった。「クラス全員本を借りよう月間」を設けたことで、全児童が図書室で本を借りることができ、どの学年も平均100冊以上借りて読むことができた。 ・学校全体で読書をする雰囲気作りに関しては、忙しさから1学期よりも92%と下がってしまった。チャレンジブックの読書についても、各担任への声かけや司書によるブックトークなど積極的に関わっていく必要があった。 ・来年度に向けて、チャレンジブックの記録の仕方や活用方法などを検討し、児童が良書に親しみやすい環境作りや読みたくなる企画を考える必要がある。
道徳教育	重点項目についての児童・教師の意識の向上 ・道徳ノート（ワーク）を使い、児童に自分の心の変容に気づかせたり、教師が児童一人一人を見取ったりできるようにし、道徳の評価にもつなげていく。特に重点項目については機会ごとに呼びかけを行い、学校全体で意識を高める。	道徳ノート（ワークシート）を使い、教師が児童一人一人を見取ったり道徳の評価につなげたりすることの達成率は85%であった。ノートを使用することで、児童の個々の心の変容を見取りやすくなつたといえる。また、ノートに書いて残していくことで、評価がしやすくなつたという意見も出していた。まだ取り組みが十分でない学級もみられるため、引き続き、評価の共通理解をしていくようにする。	道徳ノート（ワークシート）を使い、教師が児童一人一人を見取ったり道徳の評価につなげたりすることの達成率は92%であった。授業中の見取りだけでは、分からぬ個々の心の変容を記述から得ることができるようになってきてはいるといえる。校内での評価の仕方について共通理解が不十分な部分もあるため、指導要録の評価と併せて校内研修の場をもち、共通理解を図りたい。
情報教育	情報モラル教育の推進 ・情報教育年間指導計画に則り、各学年の実態に応じて、情報モラルについての授業を各クラス1時間以上設定し、情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てる。	・年度当初に各学年にICT指標を配付し、各学年で身につけるべき力を確認し、各教科に取り入れるように促した。 ・5月に外部人材を活用し、5・6年生に情報モラルについての授業を実施した。また、教職員向けに情報モラルについての学習会を実施した。 ・情報モラルについての授業をまだ行っていないと回答した33%の教職員に関しては、指導資料の積極的活用を呼び掛けていく。	・11月を情報モラル強化月間とした。また、中学生を対象に情報モラルの学習会を実施した。教職員アンケートの結果は67%から100%になった。外部講師を招聘しての講義は効果的であった。来年度以降も外部講師による情報モラル学習会は継続していきたい。 ・来年度から実施される市が発行するICT指標やプログラミング教育を、今後どのように各学年の学習活動に結び付けていくかが課題である。4月の段階から目指す姿を共有し、確実に身につけることができるようにしていきたい。
家庭・連携・地域との	開かれた学校 ・保護者・地域に対して、便りやホームページで学校の教育方針や行事の様子などを積極的に発信し、信頼を深める。 ・生活科や総合学習、クラブ活動で地域の方を活用するとともに、図書ボランティアや防犯隊の方々との触れ合いを通して、児童も職員も地域の方々とつながりを持つ。	・保護者アンケートでも96%の肯定的回答があり、学校だよりやホームページ等で、地域へ積極的に情報発信されていた。 ・総合学習では、5年の米作りや、3年の「符津のじまんを見つけよう（公共施設）」で、地域の方々を活用し学習することができた。 ・児童の安全確保ということで、校下の町内会長や防犯隊長、警察の方、育友会の役員、学校職員とで連絡協議会が開かれ、連携を図ることができた。	・保護者アンケートでも97%の肯定的回答があった。学年発表会やプラスバンド部のさよならコンサートやオーケストラの鑑賞会や書き初めの作品公開など、学校公開の機会を積極的に設け、保護者や地域の方にお知らせし、参加していただくことができた。 ・総合学習では3年の「名人と体験しよう」や5年の「収穫祭」などで地域の方とふれあい体験することができ、クラブ活動では将棋クラブやカルタクラブで地域の先生に教えていただきカルタクラブは小松市のカルタ大会にも参加することができたなど、地域の方とのつながりを持つことができた。
学校関係者評価	【最終評価】 ・学力調査の結果を受け、弱みの部分を改善できるよう学校でも取り組んでいる。家庭学習も充実させ、家庭と協力していってほしい。 ・家庭学習については、宿題内容にも織つながりも鑑みて検討してほしい。宿題をした上で自習勉強なので、まずは宿題を大切にしてほしい。 ・ランドセルの中身についての保護者の声を受け、小さい子にとっては重いランドセルは負担が大きいので、置いていく物については今後学校で検討をお願いしたい。 ・児童虐待については、今のところはないとのことだが、今後もアンテナを高くしていってほしい。 ・グローバルな時代なので、外国語も大事。外国語や学力や生徒指導についての中連携も大切にしていってほしい。 ・ネット活用が多くなったせいか、言葉（単語）だけの会話で文章が言えない子が多い。学校でも、実態把握や情報モラル教育に取り組んでいるとのことだが、今後も家庭の協力をお願いし早急な対応を続けていって欲しい。 ・「働き方改革」では、定時退庁は実際難しいが、平均帰宅時刻は早くなってきたとのこと。質の低下を招かぬよう、効率的な事務処理・働き方を目指す努力をこれからも続けていってほしい。 ・校舎の老朽化やトイレの数の少なさなどの課題があるので、児童の安全のためにも今後予定されている大規模改修に期待したい。 ・バスケットボール競技大会では、自校の児童の良い所と直したらよい所に自分たちで気づけたようだ。他校と交流することで、自分たちの良さなど改めて見直すことができたようであつた。		